

【HACCP?】

食の安全を確保する手段である HACCP を農業に当てはめて“HACCP 方式”として畜産にも適用することになった。これは世界的な食の安全確保の手段として共通の流れである。ただしこれは人間の食の安全に問題が集中しており家畜の QOL (Quality of life) とは関係ない。臨床獣医師たるもの、動物の側にとって、動物の幸福の視点から食の安全を考えてみても良いのではないだろうか？

【そもそも畜産とは？反芻動物とは？】

さらに能天気な話は続く。畜産とはそもそも何なのか？家畜とはそもそも何なのか？現状がわからなくなったときには原点に立ち返って見直すことも一つの手段である。

“家”という文字は“屋根の下の豚”という意味である。家畜が人の残飯や排泄物や畦草や森林の下草を食べ、その排泄物は堆肥の原料となり農作物を実らせる。それを人が食べ、家畜から得られた乳や、時には家畜そのものも食べ・・・という循環が畜産の原点である。この循環のスケールが、家から村、村から周辺地域、周辺地域から国、国から世界へと大きくなって来たのが現代である。

反芻動物は人が利用できない草（粗飼料）を人が利用できるタンパク質に変換できるというメリットがあったから家畜となり得た。では現代はどうであろうか？牛は世界的に不足している穀類を、ルーメンアシドーシスが起きる限界を超えて食べながら乳や肉を生産している。穀類を多給することで人の食料との競合が生じている。さらに穀類を多給して作られた乳の取引基準は脂肪でありタンパク質ではない。肉の最上級品である A5 の肉は脂肪が 60%以上を占め、本来の畜産の目的であるタンパク質生産からはかけ離れてしまった。

畜産や反芻家畜の原点から大きく外れた日本の畜産は、輸入穀物依存により国土への窒素の過剰負荷をもたらした（臨床獣医 2008 年 8 号参照）。日本の畜産は自然を相手にする農業から、原料から物を作り出す工業に変化しつつある。

臨床獣医 2009 年 10 月号掲載原稿を一部改編